法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-27

<著書紹介>『沖縄風物誌』

野原，三義

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
18-19
(開始ページ / Start Page)
60
(終了ページ / End Page)
62
(発行年 / Year)
1995-02-24

Hosei University Repository

『沖縄風物誌』

野原三義

比嘉実氏との共著、1984年に出版された。中本さんの著書のなかで、唯一の読みやすい本である。彼が生まれ育った玉城村奥武方言が沢山でてくる。この方言こそが彼がものを考えるさいの最も根底にある言語である。辞書的な意味の書き方ではなく、その土地で生きた者でないと書けないような、生活をまるごと書き出した民族誌といっていいようなものなのである。突然、一冊だけ、こういうのを書いたのだが、もっと書いて欲しかった。彼にしか書けないものだからである。そういえば奥武方言の辞典の話を全く聞いたことがないがどうしたのだろうか。総決算のうちには方言学者なら誰でも目論見そうなものだが、まだ、ずっと先のことと思っていたのだろうか。これも残念だ。最適任だっただけに。

昔、首里方言が琉球方言の代表ということがあった。どうにかすると今も類することがある。首里・那覇方言は、琉球はおろか沖縄も代表できない。できるとすれば、せいぜい沖縄南部方言（仲宗根先生の用語だが、その範囲は沖縄中南部のこと）あたりである。「小さい日本、大きい琉球」という節があり、多様さをいっている。明治中期のものを純粋な方言とすれば、那覇出身の筆者には北部の方言は、実に外国語のようなものであった。奥武方言で太陽をティダ、陽光をティダンと区別している。後者は珍しい言葉だ。ティダンヌクー（太陽暖）、タィダンアミー（太陽雨）などともあるから、南につながる言葉ではないかもしれない。ニンセーター（青年達）のようなンも変わっている。中本さんは、よくウジ（腕）のようにディ→ジになる言葉を話していた。変わっているなと思っていた。かなり後のはなしになるが、筆者のゼミに奥武出身の若者が入ってきて、ディ→ジというのは変です。年寄りもそうは言わないというのである。あの現象は、奥武方言の古い音韻現象の最後の残り火だったのだろうか。言語現象にはもちろん、そういうことも起こりうる。

『国語学』136 集に、二人称代名詞のッヤーの語源について書いたことがある。ウラの子分などではなく、中南部方言にみえかくれしている「イガ」のような形からの変化だといったのである。すると、中本さんから間違いだといって来たものだ。g が軟口蓋摩擦有声に変化し、ついで脱落・融合して出来たという推論には、証拠を出せというのである。困っていると、『沖縄風物誌』がでて、その中に、ナーベーラーの語源は「長延瓜」だとあり、それに「ながばえうり」とルビがある。「ばえうり」のところは別として、「なが」がナーになるなら、筆者の推論と同じじゃないかと思った次第である。それで、すぐ電話をしようと思ったのであるが、何故かしなかった。そのうちと思って、とうとう聞かずじまいになってし

Hosei University Repository

まった。どうなのかなあ中本さん。僕はまだ撤回する意思はないが。

この本にはガジュマルと書かれた箇所が10例くらい見える。そのことについて、面白くないなあと思っている。方言例は、ほぼ、片仮名で書かれているから、これガモ方言かようと言いたいのである。しかし、63ページに、シロオビアゲハ、コノハチョウ、ヨナグニサン他にもハイビスカス、ラビットフィッシュなどもあるから、学名は片仮名という訳である。すると学名なの？。それでいいの？。と言ってみたいが、もう止めておくか。

玉城城址から眼下に奥武島が見える。橋が架かっていて、青い海に抱かれている。橋を渡って、左の方100 メートルばかり行ったところに、中本さんの家はあった。最初に行ったのは35年くらい前であろうか。彼は海人であるのだろう。対岸の村人は、畑を耕して生活しているが、その人達のことをアギーというんだ。海で生計をたてるウミンチューの方が上だと、かなり誇りに思って言っているなと感じたことがあった。生活の章の「船と漁業ー内海と外海」「ニヌファブシ（北極星）をめざして」「ウェーク（櫂）の語源」の節のところなど、中本さんの面目躍如だ。「青波白波を乗り切って走る」サバニの話が10ページも続いていて、「自然の力を恐れる漁師たちが、風や波にさかわらず、自然の力を認め、それから身を守るために考え出した貴重な遺産なのである。そこには自然に対する傲漫な心はみじんもない」のがサバニなのだという。サバ（鮫）の種類にウンジャーラ、ウフバニー、オーナンジャー、イッチョーサバ、ミーダナーがあるという。とりたてのカラスグヮー（アイゴの稚魚）の刺身は美味、口の中が刺されるのもかまわず食べるとあるが、さすが海国だ。アシチンの骨がいっぱいある刺身をたべたことがあるが、カラスグヮーの刺身というのは、聞いたこともない。食べてみたい気もするが、刺されるなら御免こうむりたい。島が見えなくなってからの自分の位置の確認法なども興味を覚える。中本さんの海の文章は活写といってよい。これで一冊にしてもらいたかった。奥武島には畑はないが対岸の方に、ある程度もっているのかもしれない。サトーキビに関すること、田んぼに関することも述べているから、こっちの方の難儀もしたようである。

お早ようございます、今日は、という挨拶の言葉を方言で何といえばよいか。よく新聞をにぎわす話題である。チューウガナビラというのは、首里語なのだろうか。那覇語の平民の言葉なら明治生まれからは観察しているが聞いたことがない。「あいさつ」という節に「沖縄のあいさつは、相手の行為に軽く触れ、これを話題にすること」とある。イチョーミシェーサヤー（座っていらっしゃいますね）、マーカイメンシェーガ（何処にいらっしゃいますか）と相手に対して、何でも声をかければ良いのである。きまりきった言葉こそないが、こんな言葉を無数に言うことによって、あいさつ行動を行っているのである。共通語は「今日はいい天気ですね」「そうですね、いい天気ですね」というから、これは、「相手の言葉に気を配」ばっているといい。沖縄のは「相手の行為に気を配る」といっている。長い東京生活から得た結論である。

Hosei University Repository

「人の呼びかた」のところで、東京では「サザエさん」のように「さん」をつけて呼ぶ。それに対して、沖縄はナビー、ハナコーのように呼びすてにする。曰く、ヤマトゥ文化は「へだたり」をよしとする文化であり、沖縄文化は、「ふれあい」を求める文化である。ある役所を訪れたときに聞いたのだが、年配の男性が若い女性職員の名前を呼びすてにしているのである。日本国になったからは、ウチとソトは区別すべきではないかと思った次第である。キャンパス語を見ていても、ウチナーの若者は、このウチナーヤマトゥグチ的行動に気付いていない場合が多いと思うことがある。

ハーメーは半命、タンメーは短命、ハンシーは半死などと言われることについて、語源は、ははまえ（母前）、たーりーめー（大人前。ターリーは中国語に由来）、ははあむし（母母衆）と解いている。冗談の意のテーファは、中国語の「大話」に由来しているということなども含め、なかなか皆に浸透していかない。メンソーレーについて、あれほど「候ふ」言葉などではないと言っても、方言学以外の者は耳をかさないのである。ともあれ、中本さんの正しい部分は、共有財産になっていけばよいのだが。

さいごに、もう一冊『奥武の風物誌』か『奥武方言の世界』かを読みたかったなあで締めくくりとしよう。

（沖縄国際大学教授）

崎浜秀明先生、我部政男先生と談笑するお元気なころの中本先生